The Comedians について
— 変装の役割 —

植木　利彦
倉敷芸術科学大学国際教養学部

(2004年9月24日　受理)

はじめに

The Comedians、[1]『喜劇役者』は、グリーンが1950年代から1960年代にかけて三度ハイチを訪れたが、とりわけ1963年8月にポルトープランスにある、小説中のブラウン所有のホテル・トリアノンのモデルにもなった、ホテル・オロフソンに二週間ほど滞在し[2]、その間に見聞きした経験をもとに創作された作品である。一般的には批評家の間では、*The Quiet American*、『おとなしいアメリカ人』や *Our Man in Havana*、『ハバナの男』と同じく、当時のハイチを支配していた独裁政権に苦しむ庶民の姿を世界に暴く政治的な意図をもった作品としての解釈と、真の意味での喜劇役者とは、登場人物のなかの一体誰であるかという点に関しての追及と分析が行われているようである。グリーンはマリア・フランソワ・アランとの対話のなかで自ら"*The Comedians* is the only one of my books which I began with the intention of expressing a point of view and in order to fight —— to fight the horror of Papa Doc's dictatorship"[3]、と政治的な弾圧を描くつもりであったことを述べているので、その点については疑問の余地はないが、同時に、自らの人生を演じきる多くの登場人物を目にするとき、この二つの要素を織り交ぜて作品が創作されたのは明らかである。

それと同時にグリーンは作品のなかで主要な登場人物であるブラウン、ジョーンズ、そしてスミスはごくありふれた名前で、「まるで笑劇(ファルス)のなかの道化のマスクのように、おたがいにどうにでも取り換えのきく名前だ」[4]と述べているが、事実彼等の間ではそれらの名前を取り替えても何ら不思議ではない共通性や、彼等がある出来事を境にその生活態度をがらりと変えてまるで別人のように思える行動を取るようになる。この小論ではブラウンとジョーンズが変装を境にその生き方を大きく変えた様子を中心に変装の意味を考察したい。

ブラウン

「私は優等生だったし、いずれは聖職のお召しをうけることとなかば期待されていた。私自身そう信じてさえいた。召命の意識は流感(グリップ)のように私の身辺に立ち込めている、いわば非現実の瘴気であり、その熱度は清涼な合理的な朝には正常以下に低下するが、夜になると熱病の域にまでたかまったほかの少年たちが自慰の悪鬼とたたかうように、私は信仰に対する疑問とたたかった。」(67) ブラウンは級友からも神父達からも期待され、本人も聖職につくことが当然

のように思っていたが、「信仰に対する疑問とたたかった」という告白から判断すると、ブラウンは絶対的に神を信じることができなくて、心の中に疑心があったことを示すものである。彼にはジョーンズやスミス氏のように自分の信じるものにinnocentな情熱を注ぐ資質に欠け、何処となく覚めた性格を持っている。そうした彼の人間性が端的に垣間見れるのが、彼が教育を受けた聖母訪問学院の私演会での変装とその後の出来事であろう。彼は『ロミオとジュリエット』の劇中の老修道僧ロレンスの役を与えられた。それは神父達がブラウンが将来なるであろう職業への期待とそのための練習として選んだものだろう。従って彼はその役割を精一杯演じることが大切なのだ。しかしながら、禁欲的な修道僧の役柄なのにブラウンはロミオとジュリエットという恋人達の情熱に官能を刺激され、変装のまま学院を脱出してカジノに向かい、そこで知り合った女性の部屋でひと時を過ごすことになるが、そのときの不思議な出来事が次のように描写されている。

> 私達はベッドに横になっているあいだにひとつ妙なことが起こった。私が恥ずかしがり、おびえていて、ひどく扱いにくいので女は困っていた。彼女の指ではどうにもならず、唇を使ったが功を奏しなかった——ところへ突然、部屋のなかへ、丘の下の港から一羽のカモメが舞い込んだのである。一瞬、室内は白い鳥の翼の長さで測られるような気がした。彼女はおびえた叫び声を発して身を引いた——狼狽してるのは今度は彼女のほうだった。私は彼女をおちつかせようとして片手をさしのべた。鳥は金縁の鏡の下の小箪笥の上に降りてとまり、その長い竹馬のような脚をまっすぐに立てて私達を眺めていた。まるで猫のように完全にこの部屋に居ついたような顔をして、いまにもその羽根をつくろいはじめそうに見えた。私の新しい女友達は恐ろしさに小さく身をふるわせていたが、気がついてみると急に私はどんな大人にも負けないほど強くたくましくなっていて、まるで前から恋人どうしだったように易やすと自信にあふれて彼女を抱いた。それから何十分間か、私達はカモメが去って行くのに気がつかなかったが、私自身はあの鳥が部屋を飛び出て港へ、そして湾のほうへ飛んでゆく翼のはためきを自分の背中に感じていたといつまでも思いつづけるだろう。(70)

聖職者とは、神の深い慈悲と愛の具現者であり、同時に救いを求める人々、悲しみに打ちひしがれた人々、不幸に嘆く人々のために自分の肉体と人生を犠牲にして奉仕する者でなくてはならない。ブラウンはそうした聖職者になることを期待されていたのだから、突然のカモメの出現によって震えおののいている女性をやさしくいたわり、守ってやることが彼の役割であったはずである。ところがそれまで未知の経験との遭遇に震えおののいていた彼が、女性と自分の立場が入れ替わり、女性が震えているのを見た後、彼は力で彼女を支配する行為に出た。相手の弱みに付け込んで一仕事しようとするのは、詐欺師、ジョーンズの得意とするところであったが、ブラウンにもそうした性格が隠されていたのである。そうした行為は世俗人のすることで、決して神に仕える者のする行為ではない。彼は世俗的な欲望の前に化けの皮を見事に剥がされたようである。カモメは、彼が聖職者となる資質を備えた人物かどうかを見極めるために神より遣わされた使者のようであり、彼の資質を見極めて窓から飛び去ったようである。翼のはためきを背中に感じていたのは神からの決別のしるしであろう。そして彼自身「私の退校は、カジノで現金に替えるのを忘れたルーレットの五フラン賭け札をミサの献金袋のなかへ落

とし込むという不謹慎な行為の結果だった。」(70−71) と述べているが、この行為は逆に彼から神への決別を意味するものと考えられる。彼のこのような期待している人々への裏切りとも思える行為に走らせた原動力は何であろう？　考えられることは、彼の父親は誰であるか不明であること、そして母親は幼い彼を聖母訪問学院に預けて姿をくらました事情から推測すると、幼い彼が生きていくには、信仰に疑問を感じていてもいなくても、それを隠して聖母訪問学院では素直で誠実な学生であり、聖職者達の期待に応えるように努力することが一番安全な方法であると考えられる。そのために彼は優等生の仮面を被り続けることに苦心したのであろうが、成長し、一人で生きていける年齢に達し、偶々学生たちが演じる演劇に出演したとき、ロミオとジュリエットの情熱が彼の警戒心を解き放ち、本心を暴露する結果となったのであろう。すなわち、ブラウンは彼の本性を隠していた変装を投げ棄てて本来の自分自身になったといえる。とは言うものの、それ以後、ブラウンは懐かしむような眼差しで聖母訪問学院での生活を何度か思い起こしているが、どこか心の片隅に聖職者になりたい憧れはあるが、彼の本性であるシニカルな性格が信仰への絶対的な傾注を拒んでいるのである。彼はまさにマルタが言うように「“神父(プレートル・マンケ)のなりそこね”」(258) なのである。

ジョーンズ

ジョーンズはアスプレー社の旅行鞄を一つ持ち、世界を放浪している素性のわからない人物、調子のいい嘘を織り交ぜて面白おかしく話を作り上げる詐欺師、イギリスの警察当局から追求されているらしい人物という紹介である。彼はハイチのパパ・ドク・デュバリエの率いる独裁政権に武器を密売するような話を持ちかけ、もう少しで成功しそうなところで嘘が発覚して秘密警察であるトントン・マクートに追われ、港に停泊していたオランダ船籍のメディア号に逃げ込むが、船長に歓迎されず、船にあったパーティー用の変装衣装で女性に化けて南米の某国大使館に逃げ込むのであるが、そのときの彼の変装を見てみよう。

> フラメンコの踊り子のためにデザインされたスペイン衣装も、オランダ百姓女の凝った帽子も、けばけばしくないというわけにはいかなかった。私たちは懸命になって、両方のものをなるたけ人目をひかないようにとり合わせ、一方のヴォレンダムの帽子や木靴も、他方の小型マント(マンテイラ)も、両方のおびただしい下スカートも割愛することにした……さらに奇妙だったのは、ひとたびこれだけの絶大な犠牲を払ってしまうと、彼が専門家じみたはりきりぶりで芝居気を出してきたことだった……彼は私の腕によりかかって歩み板をおりていった。そのスカートがとても長かったので、彼はヴィクトリア朝の貴婦人が泥んこの道を横切ろうとしているように、片手でつまみ上げていなくてはならなかった。船の見張り番が、ぽかんと口をあけてわれわれを見つめた。船へ女が、それもそんな女が来ていたとは、むろん知る由もなかったのだ。ジョーンズは見張り番のわきを通りすぎるとき、その鳶色の目で、見すかすような、そそのかすような一べつをなげた。ショールの下では、その両眼がどれほどすばらしく大胆に見えるかを、私は知った。これまでは口ひげのために、効果を消されていたのだ。歩み板の下で、彼はパーサーを抱きしめ、その両頬にひげそり粉のしみを残した。警官は鈍った好奇心でわれわれを眺めていただけだった。――早暁の時刻に下船した女はジョーンズが最初でないのは明らかだった。それにジョーンズでは、カトリーヌ小母さんのところの女たちを知っているどんな男にも、とても性的魅力を感じさ

せそうではなかった。(249－50)

ジョーンズという男は例えお遊び的な変装であろうとも、嬉々として最大限の努力を払って自分の役割を精一杯演じているのである。彼にはブラウンのような覚めたシニカルな態度は何処にも見受けられない。ジョーンズが世界のあちこちで行ってきた詐欺的行為は決して誉められたことではないが、多分彼は詐欺行為も成功するものと信じて、最大限の努力をし、実行中は精魂を傾けたことと想像される。何故ならブラウンが、今回ジョーンズが相手にしているのは独裁政権であり秘密警察だから、失敗すると生命の危険があると忠告するほどジョーンズは自分が行っている詐欺行為に熱中しているのである。その姿は菜食主義の普及に熱中しているスミス氏とまったく同じ熱意と無邪気さを共有していることを示している。ジョーンズやスミス氏にはブラウンにはない誠実さや熱意が見られるのであり、彼らこそ信仰のためには全身全霊を傾ける聖職者と同じ資質を備えている人物と考えられる。事の良し悪しは別にして、ジョーンズが「『いつもおれは、スミス氏とおれとはちっとばかり共通のものがあると感じていた。同じ厩舎から出た馬みたいにね』」(224) というのももっともである。

ジョーンズはスミス氏のように自分の生命と生涯を後悔することのない大儀にかけることを夢見ている男なのである。彼は、第二次大戦中、進攻してきた日本軍と戦うために志願するが、偏平足のために拒否された。そのとき彼は、「インパールにいた時分には、おれは日本軍に追いつかれればいいと思いかけた時もあったくらいだった。そうなれば、当局は非戦闘従軍者たち、おれや陸海空軍の軍属たちやコックまでも武装させただろうからな。」(306) と語るほど大儀のために生きたかったのである。しかしこれまで彼の場合は、生まれ育った環境と置かれた状況からして、そうした機会に恵まれることがなかったといえる。「『どういうものか、自分のやりたい仕事が見つからなかった。』」(306)、「『おれはただ自分のチャンスをもとめていたんだ』」(307) というのが本当だろう。従ってジョーンズは自分のことをある時は少佐、ある時は大佐と名乗り、華々しい武勇伝を誇らしげに語っているが、それは単なる法螺話ではなく、そのような自分であって欲しいと願う彼のかなわぬ夢、憧れの裏返しであったと考えられる。そのように考えてみると、ジョーンズの詐欺行為も単なる犯罪行為ではなく、彼の実力を世間の人々に誇示する自己表現の手段であったのかもしれない。

ブラウンは、ジョーンズのことを「おそらく彼は、曲がりくねった人生行路をたどりながら、たえず、“徳行”への秘そかな、望みのない恋に耽って来た男ではなかろうか？―― いつも“徳行”を遠くから眺め、“徳行”という名の教師の注意をひきたいばかりにいたずらをする子供みたいに、認められたい希望に胸ふくらませて生きて来たのだ。」(307) と述べている。そして “Jones has fantasies similar to Jim's of becoming a hero in a boy's adventure story:” [5] と R. ペンドルトンが述べているようにコンラドの『ロード・ジム』におけるジムと同じく夢想する自我の実現に憧れる人間であり、ジムにとって文明社会から遠く離れ、ジムの恥ずべき過去を知る者のいない土民の村であるパトーサンが夢を実現できる唯一の世界であったように、あらゆる所

で詐欺行為などを行ってきたジョーンズにとっても流れ着いたハイチ以外の世界では「やくざ者」(tart) (28) でしかなく、「もうハイチより外に生きるところはないんだ、」(325) ということなのである。

変装はまさにそうした夢に憧れているジョーンズに大儀に生きるチャンスを与えるきっかけとなっている。変装は彼の真の姿を隠すのではなく、彼の持つ真の自我を発揮する手段として見事に生かされているといえるのである。何故なら大使館に匿われている間、彼の日本軍相手に大活躍したという大法螺であり大嘘がもとで、ブラウンによってゲリラ部隊を率いるフィリポとその仲間の作戦指導員、あるいは軍事顧問のような立場を引き受けざるを得なくなって、フィリポの仲間達と行動をともにすることになるが、大法螺や大嘘も形には見えないが、自己の真の姿とは異なる姿を聞き手の脳裏に焼き付けるという意味ではカモフラージュ、あるいは一種の変装であると同時に潜在願望の表現と考えられる。結果的には貧弱な装備と少人数の兵力のため政府軍に追われることになる。しかしながら険しい山岳地帯では、彼は偏平足のため足が痛み逃げ続けることができず、迫ってくる軍隊からフィリポとその部下を逃亡させる時間を稼ぐために岩陰に彼一人で陣取って追っ手を食い止めようとしたとき、「ここはいい場所だ」、(good place) (325) と言ったのは地理的な状況を述べているのではなく、彼自身が多くの人命を救うという大儀に身を奉げることができるという精神的な満足感を満たせる場所であることを意味していると考えられる。その結果、"Jones for a moment became the character he pretended to be and deserves to be remembered" [6] とA.Aデヴィティスが述べているように彼は常に夢見ていた自分の姿を実現することになった。

変装

変装には幾つかの目的があると考えられる。一つは世間に広く知られている自分の姿を隠し、実際とは違ったイメージを与えることである。たとえば、トントン・マクートという秘密警察の人間は常に黒いサングラスに黒い帽子を着用しているが、それは相手に対して正体を隠し、未知なるものへの不安感を掻き立て結果的に恐怖感を与えるための変装であると考えられる。またブラウンは聖母訪問学院を出た後は、旅の行商人、ホテルやレストランの給仕など詐欺行為こそ行っていないが、行き当たりばったりな根無し草的生活、すなわちジョーンズ的な生活を送ってきたのである。もしもこのヴァガボンド的な生活を送っている姿が真のブラウンの姿であるならば、聖母訪問学院でのブラウンは神父たちの期待に添うような見事な生活態度という変装を実行していたといえるだろう。そしてその反対もありえるのである。つまり "in order to get on in the world, particularly in a place like Haiti, one must learn to shift into various roles and to mask feelings. Above all, one must at all costs avoid showing the true person to those who cannot be trusted and to those who have the power to hurt one emotionally." [7] といった自己保身のための心の変装である。もうひとつは逆に姿を変えることによって別人になり、ジョーンズの最期に見られたように普段の自分ではできないような心の深奥に潜む願望や欲望といった潜在意識を顕在

化する行為を行うことである。後者の場合には時として他人には見えない本人の人間性を暴き出す行為となることがあると考えられる。

ブラウンは自分とジョーンズの共通性について、「私は、なんだか、未知の兄弟に会うような気持ちだった —— ジョーンズにブラウン、名前もたがいに取り替えっこできそうだったし、身分にしてもそうだった。もちろん、結婚式はあったのかもしれない —— 私の母はいつもそんな印象を私にあたえていた。が、とにかく、われわれは二人とも水のなかに投げ込まれ、沈もうと泳ごうと勝手次第とされたのだが、われわれは泳いだ —— たいへん遠いところから別々に泳ぎつづけてきて、こうしてハイチの墓地で落ち合った」(306) のだと述べている。一方ジョーンズはフィリポのゲリラ部隊の作戦指導者となり、最後には彼らのために生命を犠牲にすることになるが、フィリポとその部下たちから尊敬の念を勝ち得ているのである。その姿は、変装以前の聖母訪問学院でのかつてのブラウンの姿を彷彿させるものである。まさに彼らは変装を境にしてその生活を入れ替えたかのように思えるのである。その点についてG.M.ガストンは "Later, as Jones' image straightens in his mind, Brown begins to look on him as a counterpart who symbolizes what he has lost." [8] と述べている。

おわりに

小説においては、登場人物の人間的資質を明らかにするきっかけとして作者はいろいろな手法を用いる。例えば、ジョセフ・コンラッドは小説の中で「凪」や「嵐」に遭遇する場面を設定していることはよく知られているところである。また他の作者は登場人物が非日常的な出来事や危機的な状況に遭遇するような手法を用いることも多々ある。そうした場合、読者はその異常な状況が小説の展開の上で、あるいは登場人物の人間的資質の解明の上で重要な要因となることを容易に予想できるのである。ところが変装というのはそれほどの異常な出来事ではない。何故なら古くは、女性の化粧、付け睫毛、裁判官のかつらや法衣に始まって、昨今では背丈を高く見せる上げ底の靴、サングラス、髪の毛の染色、挙句の果てはニューハーフと呼ばれる人々の出現等、変装は日常の一部であって特にわれわれの注意を引くものではない。

それ故変装を利用したグリーンの手法は目立たないが洒落た手法といえるだろう。グリーンは変装という手法によってコインの表裏とも言えるブラウンとジョーンズの二人の人物の精神活動の変貌を回転ドアを通り抜けてきた二人がまるでマジックの如くドアの外と内で入れ替わったように見事に描いて見せた。

Notes

1) Graham Greene, *The Comedians* (London: The Bodley Head & William Heinemann, 1976)

2) 山形和美訳、『グレアム・グリーン伝内なる人間』[下]、東京、早川書房、1998年、p.290

3) Marie-Françoise Allain, *The Other Man: Conversations With Graham Greene*, (London: The Bodley Head, 1983), p.80

4) 田中西二郎訳、『喜劇役者』、東京、早川書房、昭和55年、p.26 以後本文中の翻訳については頁数のみを

表記

5) Robert Pendleton, *Graham Greene's Conradian Masterplot* (London: Macmillan Press LTD, 1996), p.131

6) A.A.DeVitis, *Graham Greene* (Boston, Massachusetts: Twayne Publishers, 1986), p.125

7) R.E.Miller, *Understanding Graham Greene* (Columbia: U'niversity of SouthCarolina, 1990), p.120

8) Georg M., A.Gaston, *The Pursuit of Salvation: A Critical guide to the Novels of Graham Greene.* (New York: the Whitston Publishing Company, 1984) p.96

On *The Comedians*
— Role of Disguise —

Toshihiko UEKI
College of Liberal Arts and Science for International Studies
Kurashiki University of Science and the Arts,
2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan
(Received September 24, 2004)

In *The Comedians*, Disguise is considered to have many important roles. The first role of disguise is to camouflage one's own figure for fear of being noticed by others. The second may be the disguise of mind to conceal one's own real intentions or feelings for considering one's safety. The third, by camouflaging one's figure, may sometimes be to reveal one's own ego or desire in the realm of subconsciousness.

In this paper, we want to analyze the roles of disguise by which Brown and Jones, the main persons in *The Comedians*, were to recognize their own real selves.